

優秀賞

やさしさのバトン

宮城県 南吉成小学校 六年
堀内 津麦

「お母さん、止まって!」

セミの大合唱が大ボリュームで流れている、細くて急な下り坂を車で走っていると、目の前の自転車が突然大きく回転してたおれた。私は車を止めてもらい、買ったばかりの母の水を奪うように取り、高校生くらいの男の人のもとへ走った。

「大丈夫ですか? 頭とか打っていませんか?」

けがをしているところに水をかけながら聞くと、

「大丈夫です、ありがとうございます。」

と、彼は照れくさそうに笑った。母も車をはじに寄せて、かけよってきてくれた。すり傷だらけだったので、私は水をかけたところをウェットティッシュでふいていった。母も、いつもパンパンのバックの中から、少しあせりながらばんそうこうを出してはった。

「家が近いから大丈夫です。」

という彼の言葉を聞いて、私たちは車にもどった。

家に帰ると、春休みに自転車で転んだときのことを思い出した。くつひもがペダルに絡まって、自転車ごと横にたおれてしまった。転んでいる私の横を、数人が見て見ぬふりで通り過ぎていった。痛いし悲しいけれど、泣くのもはずかしい。

血がにじんだ傷口を袖で押さえてかがんでいたら、知らないおばあさんが私にかけより、

「大丈夫?」そう言って、ばんそうこうをはってくれた。このやさしさに、私は痛みが一気にふき飛んだのおぼえている。泣きそうだった顔に笑顔がもどった。「大丈夫」という言葉は“魔法の言葉”だと思った。母にこの話をして、

「助けてくれたおばあさんにお礼がしたいんだけど、どうしたらいい? 名前も住所もわかんないんだけど……。」と聞くと、

「じゃあ、もしどこかで困っている人を見かけたら、おばあさんに助けてもらったときみたいに声をかけてあげたらどう?」と母は言った。

私は、やさしさをリレーしている感じがして、こんな恩返しのはかたもいいかもしれないなあと思った。

私がとった行動は、やさしさのおすそわけとか、お人良しとか、いろんな言い方があるのかもしれない。見て見ぬふりをするのは簡単なことだけれど、母を見て育った私にはそれができない。野良猫が死んでいれば片づけて、お年寄りが重たそうにごみを持っていけば、代わって持っていく。どれもふつうのことだが、やはり、すぐに声をかけて助けることができる母はすばらしい人だと思う。

このコロナ禍で、人にかけてよるという行動は少し悩んでしまうかもしれない。でも、こんなときだからこそ、忘れてはいけないやさしさがあり、それが必要なのではないのだろうか。いつか、あのときのおばあさんや母のように、やさしさのバトンをたくさんの人の心に、世界につないでいきたいと思った。